ヴィヴェーカ・チューダーマニ（七三―二二一）[79]

―不二一元という生き方―

山本和彦

〔アートマンでないもの〕

七三　いま、あなたが知るべきアートマンとアートマンでないものとの識別を私はあなたに語ろう。あなたはそれを正しく聞いて、自分でそれを決定すべきである。

七四　髄、骨、脂肪、肉、血液、皮膚、表皮が身体の構成要素であり、それらにともなう足、腿、胸、腕、背中、頭が必須な肢分であり、それらの部分である。

七五　「私である」「私のもの」として知られている無知の居場所である身体は、覚者によって「粗大なもの[80]」と呼ばれている。虚空風火水地は微細な元素である。それらは〔以下の如くである〕。

七六　それぞれの部分が結合して、粗大なものとなる。それらは粗大な身体の原因である。声などの五唯[81]は、享受者の楽のために、それ（感官）の対象となる。

七七　〔欲望の〕対象という断ち切り難い足枷に縛られている愚者たちは、〔生死を〕往来し、〔天地を〕浮沈し、自らの業（カルマン）という強力な使者に迅速に運ばれる。

七八　鹿、象、蛾、魚、黒蜂の五つは、自らの属性に従って、声など（色香味触）の五つ〔の感官の対象〕の一つと結びつくと、五元素（虚空風火水地）へと分解する（死ぬ）[82]。人間は、何と五つすべてと結びついている。

七九　〔感官、欲望の〕対象は、黒蛇（コブラ）の毒よりもさらに有害である。毒は食べた者を殺すが、それ（欲望の対象）は眼で見ただけの者を殺す。

八〇　〔欲望の対象は〕捨て去ることがとても難しいから、対象に対する欲望という大きな足枷から解放された者だけが解脱に相応しいのであり、他の者は相応しくない。たとえ六派哲学[83]を知っているとしても。

八一　一時的な離欲で解脱を求める者たちや現生の川を渡ろうとする者たちを、欲望という鰐が、喉を噛み素早く連れ去り途中で溺れさせる。

八二　〔欲望の〕対象という名の鰐を、離欲というよく切れる刀剣によって殺す者は、妨害されることなく現生の川を渡って行く。

八三　〔欲望の〕対象に満足する道を行く、心の汚れた者は、死に至る道を一歩ずつ歩くことが決まっている。利益

をもたらし、善良な人である師（グル）の言葉（教証）と自分の推理（理証）によって、〔道を〕行く者は成功する。以上は真実であるとあなたは知るべきである。

八四　まさにもし、あなたが解脱を求めるのなら、たとえば毒を避けるように、遠くからでも〔欲望の〕対象を避けるべきである。不死の甘露（ピーユーシャ）のような満足、慈悲、忍耐、正直、寂静、自制を常に真剣に実行すべきである。[84]

八五　始まりなき無知によって作られた束縛からの解脱というなすべきことを次々に避ける人、他の（アートマンと異なる）もの[85]であるこの身体に栄養を与えることに執着する人、彼はそれゆえ自分を殺している。[86]

八六　身体に栄養を与えながらアートマンを体験したい者、彼は木片であると誤認して、鰐を摑み川を渡っている。

八七　解脱を求める者にとって、身体などに対する無知（モーハ）こそが大いなる死である。[87]無知に打ち勝った者が、解脱の境地にふさわしい。

八八　あなたは身体、妻、子などに対する無知である大いなる死を捨てるべきだ。それに打ち勝った沈黙の聖者たちはヴィシュヌ神の最高の境地に行く。[88]

八九　この粗大な身体は皮膚、肉、血、動脈、静脈、脂肪、髄、骨で構成されており、尿と排泄物で充満しており、

非難（不浄であると指摘）されるべきである。

九〇　五つから作られた粗大な元素から過去の行為によって、アートマンが享受するこの粗大な場所（身体）は生じる。[89]それから、覚醒状態のそれ（身体）が粗大な対象を経験する。

九一　個我（ジーヴァ）[90]は、自分をそれ（粗大な身体）と同一視することによって、外的な感官を使って花環、白檀、女性など様々な形を持つ粗大な対象を頻繁に楽しむ。それゆえ、この身体は覚醒時に卓越〔した効果を発揮〕している。

九二　この粗大な身体は、人間にとって、外界の輪廻のすべての拠り所であり、家長にとっての家のようなものであると知られるべきである。

九三　粗大な身体には、生老死という属性がある。太っているなど多くの種類があり、幼少期などの期間がある。種姓や住期による決まり事があり、多くの種類の病気になるだろう。それは、礼拝、不敬、尊敬とさまざまなことに直面する。

九四　耳、皮膚、眼、鼻、舌は対象を認識するから、感覚器官である。発声器（口）、手、足、排泄器、生殖器は行為のための行為器官である。

九五　内官（アンタハ・カラナ）は各自の働きによって思考機能（マナス）、統覚（ディー）[91]、自我（アハンクリティ）、心（チッタ）と呼ばれる。意志や分別などをともなうから、思考機能[92]である。言葉の対象を決定する特徴があるから、統覚（ブッディ）[93]である。

九六　その場所（身体）を「私である」と誤見するから[94]、自我意識である。自分の利益（欲望の対象）に考えを定める性質があるから、心である。

九七　既知の生気（プラーナ）は[95]、各自の働きの違いと変化の違いによって、金塊や水などのように呼気、吸気、媒気[96]、上気[97]、等気[98]となる。

九八　発声器（口）など五つ（行為器官）[99]、耳など五つ（感覚器官）[100]、呼気など五つ（生気）[101]、虚空[102]をはじめとする五つ（微細な元素）[103]、統覚など（内官）[104]、無知、欲望、行為という八つの都城が微細身であると言われる。

九九　あなたは聞きなさい。微細と名付けられたこの身体は、象徴身（リンガ）でもある。まだ五つに分割されていない元素から生じ、潜勢力を持っており、行為の結果をアートマンに経験させる。自らの無知ゆえに、〔微細身は〕アートマンの無始以来の限定的属性（ウパーディ）[105]である。

一〇〇　夢はそれ（微細身）の〔覚醒と〕別の状態である。そこ（夢）では、自分（微細身）だけが残って輝く。夢のなかでは、統覚は自ら覚醒時の多くの潜勢力によって、行為者などのように振る舞い支配する。しかしそこ（夢のな

か）では、この最高のアートマンは自ら輝いている。[106][107]

一〇一　統覚（ディー）のみを限定的属性として持つすべてを目撃する者（アートマン）は、それ（統覚）によって作られたどんなわずかな業（行為の結果）によっても汚されない。〔アートマンは〕無執着なので、まさにそれゆえ、限定的属性によって作られた業によって、少しも汚されない。

一〇二　この象徴身（リンガ）は、知を本質とする魂（プンス）にとって、すべての仕事の道具である。言わば、木樵にとっての斧のようなものである。まさにそれゆえ、この魂（アートマン）は無執着である。

一〇三　盲目、弱さ、鋭さは、効果の有無による眼の属性である。同様に、聞こえない、話せないなどは、耳や口などの属性であり、知者としてのアートマンの〔属性〕ではない。

一〇四　吸気、呼気、あくび、くしゃみ、排泄など、そして上昇（魂の身体からの離脱）などの行為は、生気（プラーナ）などの働きであるとそれを知る者たちは言う。飢えと渇きは、生気の属性である。

一〇五　内官は、身体のなかでの眼などそれら（感官）のなかで、「私が〔見ている〕」という誤見[108]と顕現した光（アートマンの反射）とともに、存在している。

一〇六　自我意識は、「私が行為者である」「私が享受者である」と誤見すると知られるべきである。[109]また、純質な

どの〔三つの〕徳[110]と結びつくから、三つの状態（覚醒、夢、熟睡）に至る。

一〇七　対象が好ましいものであると楽しくなる。反対であれば苦しくなる。苦楽はそれ（自我意識）の属性であり、永遠の歓喜であるアートマンの〔属性〕ではない。

一〇八　自己（アートマン）ゆえに対象が愛しいのであり、対象自体ゆえに愛しいのではない[111]。なぜなら、すべての人にとって自己は、それ自体で最も愛しいからである。

一〇九　それゆえ、アートマンは永遠の歓喜であり、決して苦がない。熟睡中は、対象がなくても永遠の歓喜を経験できる。覚醒時には天啓聖典、知覚、伝承文学、推理が〔アートマンの存在を証明するので〕ある。

一一〇　非顕現（アヴィヤクタ）[112]と呼ばれるものは二つある。〔一つは〕無明（アヴィドヤー）である。それは最高の神の力であり、始まりなく、三徳[113]を本質とする。他のものは[114]、まさに〔宇宙という〕結果から賢者によって推理される幻（マーヤー）である。それによってこの全宇宙が生み出されている。

一一一　〔この幻は〕存在でもなく、非存在でもなく、両方（存在かつ非存在）を本質としているのでもない。異なっているのでもなく、異なっていないのでもなく、両方（異かつ不異）を本質としているのでもない。部分を持つのでもなく、部分を持たないのでもなく、両方（部分を持ち、かつ持たない）を本質としているのでもない。大きな驚異であり、言語表現できないものである。

一一二　〔この幻は〕清浄で不二のブラフマンを悟ることによって滅せられる。たとえば蛇という誤知は、縄という識別知から滅するように。〔この幻の〕徳（グナ）は激質（ラジャス）、暗質（タマス）、純質（サットヴァ）としてよく知られている。それらは、各自の結果による呼称である。

一一三　激質には、働きを本質とする投影力（ヴィクシェーパ・シャクティ）がある。そこから、太古の活動が流出した。[115] そこから、怒りや苦しみなどという心（マナス）[116] の変化が常に生じるだろう。

一一四　愛欲、怒り、貪欲、虚栄、怨み、自我意識、羨望、嫉妬などは、激質の恐ろしい属性であり、それらによって人間は活動する。それゆえ、激質は束縛（輪廻）の原因である。

一一五　覆い隠す（アーヴリッティ）という作用は、暗質の属性の力である。それによって、事物は〔真実から〕異なって見える。それはまさに、人間が輪廻に入る原因であり、投影力が発揮される原因である。

一一六　智慧ある者であっても、賢者であっても、才知ある者であっても、非常に微細な対象を一瞥するだけで理解する人[117]であっても、暗質によって〔事物を〕理解できなくなる。さまざまに明瞭に説明されたとしてもである。迷妄を上に重ねただけのものを正しいと彼は考え、その属性に固執する。ああ、この滅し難き暗質の大きな投影力は、なんと強力なことか。

一一七　正しい判断の欠如、反対の判断、不信心、もしくは誤った考えから、[118] これ（覆い隠す力）と結びついている

人を、投影力は決して解放しない。投影力は絶え間なく彼を苦しめる。

一一八　無知、怠惰、愚鈍、眠気、不注意、愚蒙などは、暗質の属性である。これらと結びついた人は、何も理解できなくなり、眠ったように、単なる柱のようになる。

一一九　純質は清浄であり、水のようなものであるが、それでも二つ（激質と暗質）と結合して輪廻する。アートマンの輝きがそこ（純質のなか）で反射するとき、それ（純質）は太陽のように全世界を照らす。

一二〇　しかし〔激質や暗質と〕混合した純質の属性は、慢心などがないこと、勧戒（ニヤマ）[119]と禁戒（ヤマ）[120]を始めとするもの（ヨーガの階梯）[121]、信仰（シュラッダー）、誠信（バクティ）、解脱を求めること、神的なものの獲得、存在しないものに対して活動しないことである。[122]

一二一　清浄な純質の属性は、〔師からの〕恩恵（プラサーダ）、自らのアートマンの経験、最高の寂静、満足、喜び、最高のアートマンの成就である。それによって、彼（最高のアートマンへ到達した者）は永遠の歓喜を味わう。

一二二　非顕現なものは、三徳からなるものであると既に述べられており、[123]それはアートマンにとっての、原因としての身体（カーラナ・シャリーラ）であると言われている。熟睡はこれ（身体）の〔覚醒・夢と〕異なる状態である。[124]〔つまり熟睡中は〕すべての感官と統覚（ブッディ）の働きは停止している。

一二三　熟睡とは、すべての種類の認識活動が寂滅しており、統覚が種子の〔活動しない〕ままの状態でいることである。このことは実に明白である。〔熟睡中のことは〕「私は何もわからない」とは極成である（よく知られている）から。

一二四　身体、感官、生気、意、自我を始めとし、変化したものすべて、対象、楽など、虚空（ヴョーマ）などの諸元素、非顕現なものに至るまでの宇宙のすべてのものは、アートマンではない。

一二五　幻（マーヤー）と幻によって作られた大（マハット）[125]から始まり身体に至るすべてのものは、アートマンそのものではなく、実在しない砂漠の蜃気楼のようなものである。このことをあなたは知るべきである。

〔最高のアートマン〕

一二六　これからあなたに、最高のアートマンの本質を語ることにしよう。それを知って、人は束縛（輪廻）から解放された者となり、独存状態[126]に至る。

一二七　それ（最高のアートマン）は、常に自立して存在している何かである。「私」という観念[127]の拠り所であり、三つの状態[128]を見る者であり、五つの蔵[129]と異なっている。

一二八　覚醒と夢と熟睡のなかですべてを認識する者、知とその働きが〔覚醒時に〕存在することと〔熟睡時に〕存在しないことを知る者、彼は「私」というそれ（最高のアートマン）である。

一二九　自立してすべてを見る者はいるが、彼（すべてを見る者）を見る者はいない。[130] 統覚などを輝かせる者はいるが、彼を輝かせる者はいない。彼はそれ（最高のアートマン）である。

一三〇　この宇宙を遍く満たしている者はいるが、彼（遍く満たす者）を遍く満たす者はいない。それ自身の輝きの反射によって、このすべて（全宇宙）は輝く。[131] 彼はそれ（最高のアートマン）である。

一三一　その彼が存在するだけで身体、感官、思考、統覚（ディー）は、各自の対象に対して促されたかのように働く。

一三二　自我意識（アハンカーラ）[132] を始めとし、身体に至るまで、そして対象、喜びなどは、永遠の知識を本質として持つそれ（最高のアートマン）によって、瓶のように明瞭に認識される。

一三三　それ（最高のアートマン）は内我（アンタル・アートマン）であり、太古の霊魂（プルシャ）であり、絶え間のない不可分の歓喜を経験し、常に一つであり、[133] 覚知（プラティボーダ）そのものである。[134] それによって声や気息（アス）など〔の器官〕は、はじめて活動する。

一三四　まさにその（身体の）なかで、[135] 純質（サットヴァ）を本質する統覚の洞窟[136] のなかで、非顕現の虚空のなかで、偉大なもの（最高のアートマン）は輝く。天空の虚空を太陽が照らすように、自らの輝きによって、この宇宙を照らす。

一三五　それ（最高のアートマン）は、思考機能（マナス）と自我意識の変化を、そして身体と感官と生気の働きを知る者である。それは熱鉄球の火のように、それらに従っているように見えながらも、少しも動くことなく変化もしない。

一三六　それ（最高のアートマン）は生まれず、死なず、成長せず、衰退せず、変化せず、永遠である。身体が滅するときでも、そのなかにいるそれが滅することはない。瓶のなかの空間のように独立しているから。

一三七　最高のアートマンは、物質原理（プラクリティ）[137]やその変化したものと異なっており、清浄な知を本質としており、有と無のこれ（宇宙）をすべて照らし、[138]絶対的であり、覚醒などの状態で、「私が」「私が」と〔判断する〕統覚の直接の目撃者として輝いている。[139]

一三八　思考機能（マナス）を制御することによって、そして感官（ブッディ）を明晰にすることによって、[140]自分のなかにいるアートマンを「私はそれである[141]」とあなたは直接知るべきである。生死という波を持つ、越え難い輪廻の川をあなたは渡れ。あなたは目的達成者となれ。あなたはブラフマンとして生きよ。

〔輪廻の原因〕

一三九　この（身体という）[142]アートマンでないものに対して「私である」と考えること、これが人間を束縛する。〔その誤った考えは〕無知ゆえに得られたものであり、〔無知は〕生死（輪廻）と煩悩が生じる原因である。まさにそれ（無知）によって、人は実在しないこの身体を実在するものであると考え、自己（アートマン）であると考え、〔欲望の〕対

象（食物）[143]によって滋養し成長させ守る。糸によって繭が作られるように。

一四〇　暗質（タマス）に惑わされた人には、それでないものに対して、それであるという認識が生じる。識別知がないからこそ、縄と間違えて蛇を蹴り上げて、摑んだ者に大きな災いが降りかかる。それゆえ友よ、あなたは聞くべきである。存在しないものを〔存在すると〕把捉する者には束縛（輪廻）があると。

一四一　不可分であり、常住であり、不二であり、覚知する力によって自ら輝いている、無限の力を持つアートマンを、この暗質所成の遮蔽力（アーヴリッティ・シャクティ）が完全に覆う。太陽の円輪に対するラーフのように。[144]

一四二　最上に無垢な輝きを持つ自らのアートマンが隠されたとき、その人はアートマンではない身体を無知ゆえに「私である」と見なす。それゆえ、欲望や怒りなどの、束縛するものの徳（グナ）[145]によって、投影と呼ばれる強力な激質（ラジャス）の力は絶え間なく彼を苦しめる。

一四三　大きな無知という鰐に呑み込まれた人は、アートマンに対する理解力がなくなり、その徳の属性[146]に従って、統覚（ディー）のさまざまな状態を自分で演じる。〔欲望の〕対象という毒に満ちた無限の輪廻の海を、道を逸脱したこの愚鈍な者は、浮き沈みしながら漂う。

一四四　太陽の光によって生じた雲の筋が、太陽を隠して現れるように、アートマンから生じた自我意識がアートマンの本質を隠して単独で現れる。

一四五　太陽が、厚い雲に呑み込まれた曇りの日に、冷たく唸る強風が人々を苦しめるように、不断の暗質（タマス）にアートマンが覆われたとき、強力な投影力が多くの苦によって、愚者を破滅させる。

一四六　まさにこの二つの力（遮蔽力と投影力）によって、人間は束縛に遭遇する。この二つに欺かれた人は、身体を自己（アートマン）だと考えて漂流（輪廻）する。

一四七　暗質（タマス）は、輪廻の木の種子である。身体が自己（アートマン）であるという誤知は芽である。欲望は葉であり、行為は水であり、身体は幹であり、気息は枝である。諸感官は小枝であり、〔欲望の〕対象は花である。多くの行為が生み出したさまざまな苦は果実である。そして、人はそこで〔苦という果実を〕食べる鳥である。[147]

一四八　このアートマンでないもの（身体）による束縛は、無知が根本原因であり、先天的であり、無始無終であると言われている。生死病老などの苦の連続を、彼（身体を持つ人）にもたらす。

一四九　弓矢によっても、小刀によっても、風によっても、火によっても、一千万回の祭式行為によっても、識別知という強力な刀剣なしでは、〔束縛を〕断ずることはできない。その刀剣は、創造神の恩恵によって、[148]鋭さと美しさを具えている。

一五〇　聖典を認識手段として一意専心する人には、自己の義務の完成がある。それによってのみ、その人の内官は浄化される。[149]浄化された感官（ブッディ）を持つ人に、最高のアートマンが経験され、それによってのみ輪廻の根本

原因（無知）の滅がある。

〔五つの蔵〕

一五一　アートマンの力で生じた食物所成などの五つの蔵[150]によって覆われたアートマンは、水草に覆われた池の水のように顕現しない。

一五二　その水草が取り除かれたとき、水は完全に浄化され、喉が乾いている人々の苦しみを取り除き、彼らに直ちに最高の安楽を与える。

一五三　そのように五つの蔵が滅したときに、それ（アートマン）が顕現する。〔そのアートマンは〕清浄であり、永遠の歓喜という一味を持ち、内にあり、最高のものであり、自ら輝く。[151]

一五四　束縛からの解放のために、賢者はアートマンとアートマンでないものを識別すべきである。それによってのみ、自分（アートマン）が存在・知・歓喜[152]であると知って、彼は歓喜そのものになる。

一五五　ムンジャ草などの茎の〔取り出しの〕ように、[153]知覚対象から、内在しており無執着で無作のアートマンを識別して、そこ（アートマン）ですべてを消滅させて、それ（アートマン）と同一となった者、彼は解脱者である。

〔食物所成の蔵〕

一五六　私のこの身体は食物から生じたものであり、食物所成の蔵である。それゆえ、食物によって生かされ、食物がなくなると死ぬ。この身体は皮膚、肉、血、骨、汚物の堆積であり、永遠で清浄な自立しているもの（アートマン）では決してあり得ない。

一五七　それ（身体）は、生前も死後も存在しない。生じて滅するものであり、刹那の性質があり、変化する本質があり、唯一ではなく、愚鈍であり、瓶のように知覚の対象である。どうして、そのようなものが生成変化の知者である私自身のアートマンであろうか。

一五八　手足などを持つ身体は、アートマンではない。何らかの肢体がなくても、人は生きることができるから。それぞれの機能は、損なわれないから。被支配者（身体）が、支配者（アートマン）を支配することはない。[154]

一五九　身体とその属性、その行動、その状態などの目撃者であり、存在そのものであるアートマンが、それ（身体）と異なるのは自明である。

一六〇　骨に形成され、肉に覆われ、汚物に満たされ、過度に汚れたそれ（身体）が、どうして、知者であり、自立しているこれ（アートマン）であり得ようか。それ（身体）はまったく〔アートマンと〕異なっている。

一六一　皮膚、肉、脂肪、汚物の堆積したもの（身体）に対して、私であると考えるのは愚者である。識別知を具え

ている人は、自分の本質を〔身体と〕異なるものであり、勝義（最高の真理）の存在であると知っている。

一六二　愚者は「私は身体である」と考える。学識者は「私は身体と魂（ジーヴァ）である」と考える。しかし、識別知を持つ偉大な人は、常に自分を「私はブラフマンである」[155]と考える。

一六三　愚者よ、自分を皮膚、肉、脂肪、骨、汚物の堆積したこれ（身体）であるという考えを捨てよ。あなたはすべてであるアートマンであり、無分別のブラフマンに心を置け。最高の寂静（解脱の境地）を享受せよ。

一六四　身体や感官など実在しないものに対する、誤って生じた〔アートマンとの〕同一意識を捨てない限り、ヴェーダ聖典の究極や論理の究極を知る学識者であっても、彼には解脱に関しては、風評さえない。

一六五　影の（チャーヤー）身体（シャリーラ）、映像の身体（ガートラ）、夢の身体（デーハ）、心のなかで想像する身体（アンガ）に対して、あなたは自己（アートマン）であると決して考えてはならない。生きている（ジーヴァ）身体（シャリーラ）に対してもまたそのように（自分であると）考えてはならない。

一六六　実在しないものを〔実在すると〕考える人々にとって、身体を自己（アートマン）であると考えることこそが、出生など苦の生起の種子である。それゆえ、あなたは努力して、それ（身体が自分という考え）を捨てるべきである。その考えを捨てたとき、再生を望むことがなくなる。

〔生気所成の蔵〕

一六七　既知の生気（プラーナ）は五つの行為器官[156]をともなうと、生気所成の蔵となる。[157]それ（生気）によって、食物所成の人間は満たされて、[158]すべての行為をなす。

一六八　生気所成のもの（蔵）もまた、アートマンでは決してない。なぜなら、それは風が変化したものであるから。風のように、それは〔身体の〕内に入り、外へ出るから。それは、自分と他者との望ましいもの（解脱）と望ましくないもの（輪廻）を、常にまったく知らないから。それは、常に他（アートマン）に依存しているから。

〔意所成の蔵〕

一六九　知覚器官と意（マナス）とが、意所成の蔵となる。それは「私のもの」「私である」という〔自我意識〕の、そして実在するものを概念化する原因である。名称などの差異を作り出すことが知られており、強力である。それに先行する蔵（生気所成）を満して現れる。

一七〇　五感官[159]という五人の祭官が、多くの潜勢力を燃料とする〔欲望の〕対象という牛酪（ギー）を火に注ぐことによって、燃え盛る意所成の火が世界を現象させる。[160]

一七一　心（マナス）[161]がなければ、無明もない。心は無明であり、現生の束縛の原因である。それが滅するとき、すべてが滅する。それが現れるとき、すべてが現れる。[162]

一七二　対象がない夢のなかでは、心のみが享受者など宇宙のすべてのもの（対象）を自力で作り出す。覚醒時も同様であり、違いはない。この（現象世界としての宇宙の）すべては、心の現れである。[163]

一七三　熟睡しており、意識がないときに、まったく何も存在していないことは、まったく極成である。それゆえ、人間の輪廻は、心が作り出したものであり、実際には存在しない。

一七四　雲は風によって集められ、再び風によって運び去られる。束縛（輪廻）は心によって作り出され、解脱も心によってのみ作り出される。

一七五　心は、身体やすべての対象に対する欲望を作り出す。縄で動物を縛るように、心は執着によって人間を束縛する。その後で、その同じ心は毒のような対象を適切に離して、彼を束縛から解放させる。

一七六　それゆえ、心はこの人間の束縛（輪廻）と解脱の原因である。つまり、激質（ラジャス）という徳（グナ）で汚れた心は束縛の原因となり、激質と暗質（タマス）がなくなって浄化された心は解脱の原因となる。

一七七　識別と離欲という〔解脱を求める賢者の〕属性が優勢になることによって、浄化された心[164]は解脱に役立つ。それゆえ、解脱を求める賢者は、最初にこの二つを堅固にすべきである。

一七八　〔欲望の〕対象という森のなかには、心という名の大きな虎が歩き回っている。解脱を求める善人たちは、

決してそこに行ってはならない。

一七九　心は常に享受者に、〔次のものを〕生み出す。粗大な対象と微細な対象とを残りなく。身体の違いと種姓（ヴァルナ）の違いと住期の違いと生まれ（ジャーティ）の違いとを。属性[165]の結果と行為の結果と原因の結果とを。

一八〇　心は、無執着な知を本質とする彼（個我）を混乱させる。彼は身体、感官、生気という縄で縛られている。彼自身が作った結果を彼が享受するとき、心は「私である」「私のもの」という誤見によって、絶えず彼を徘徊（輪廻）させる。[166]

一八一　付託（アディアーサ）[167]による過失のゆえに、人間は輪廻する。付託による束縛（輪廻）は、それ（心）によってのみ分別され作り出されたものである。[168]激質や暗質という過失を持つ人にとって、識別力のない人にとって、それ（心）は出生など苦しみの原因である。

一八二　それゆえ、真理を知る賢者たちは心を無知と呼ぶ。風によってのみ雲の塊が動かされるように、それ（心）によってのみ[169]宇宙は動かされる。

一八三　それゆえ、解脱を求める人は、努力して心を浄化すべきである。[170]これ（心）が浄化されたなら、果実を手に取るように、解脱を手に入れることができるだろう。

一八四　解脱に一意専心することによって、対象に対する執着を根こそぎにして、すべての行為を捨て、真実の存在（ブラフマン）への信仰を持ち、そして〔師からの〕聴聞などが確立している人は、統覚の本質である激質を追い払う。

一八五　意所成のもの（蔵）もまた、最高のアートマンではありえない。なぜなら、始めと終わりがあるから。変化するから。苦しみを本質としているから。〔欲望の〕対象の原因であるから。見る者（アートマン）と見られる対象[171]との同一性は決して経験されないから。

〔知識所成の蔵〕

一八六　統覚は、感覚器官をともなって変化して、行為者という特徴を持って、知識所成の蔵となるだろう。それは、人間の輪廻の原因である。

一八七　知識という名のもの（知識所成の蔵）は、心の影像力をともなっており[172]、物質原理が変化したものである。それは知識と行為を持ち、身体や感官などを常に「私である」と躊躇なく誤見する。

一八八　それ（知識所成の蔵）は、時間の始まりを持たず、「私である」〔という自我意識〕を本質とする個我（ジーヴァ）[173]であり、すべての日常生活（言語活動）を行う。またそれは、前生の潜勢力を持っており、善悪の行為をなし、その結果を享受する。

一八九　それ（個我）は、様々な母胎に入り（身体を得て）、上下に行き来する（生まれては死ぬ）。知識所成のもの（蔵）がそれ（個我）であり、覚醒状態や睡眠状態にあったり、苦楽を享受する。[174]

一九〇　知識〔所成〕の蔵は、身体などに基づく住期（アーシュラマ）の宗教的義務や祭式行為の属性を常に「私のもの」と誤認する。これは、とても明るい。最高我のすぐ近くにあるから。それゆえ、これ（知識所成の蔵）はそれ（最高我）を限定する属性である。〔知識所成の蔵と最高我とを〕同一視する者は、誤見のゆえに輪廻する。

一九一　このアートマンは、知識からなり、諸感官の近くの心臓のなかで自ら輝いている。[175]それは変化しないものであるが、属性（知識所成の蔵）に限定されると、行為者や享受者になる。

一九二　〔アートマン〕自身が統覚（ブッディ）の制限を受けて、〔自身を統覚と〕同一視する過失のゆえに、自分を虚妄なもの（統覚）に過ぎないと考え、すべてを本質として持つ存在（最高のアートマン）であるにも関わらず、自分を自身（アートマン）以外のものと考える。土からできた瓶のように。[176]

一九三　最高のアートマンは、常に変化せず、本質的に最高のものである。しかし、限定的属性[177]と結びつくと、その効果として属性に限定され、その属性として〔誤って〕見える。変化しない火が、鉄が変化したもの（熱鉄球）として見えるように。

弟子は言う。

一九四　迷妄によってであっても、他の何かによってであっても、最高のアートマンが個我[178]の状態〔と見なされるよう〕になるのは、その属性（知識所成の蔵）が無始以来〔アートマンを〕限定しているからです。無始であるから、無終であることが認められます。

一九五　それゆえ、これ（アートマン）の個我の状態もまた終わりません。輪廻は永遠に続きます。どうすれば、その（個我の輪廻からの）解脱ができるのでしょうか。敬愛する師よ、私に語ってください。

師は言う。

一九六　あなたは正しい質問をした。賢者よ、よく聞きなさい。迷妄によって虚妄分別された誤知は、正しい認識手段によって得られるはずの結果ではありえない。

一九七　迷妄がなければ、執着せず、行為せず、形のないもの（アートマン）は、物質と結合しない。空が青さなどと結合しないように。

一九八　アートマンは、見る者であり、属性を持たず、行為せず、〔心臓の〕内部で[179]、覚知と歓喜という本質を持っているのだが、統覚の迷妄によって個我（ジーヴァ）の状態になっている（迷妄という属性によって限定されている）。それは真実の状態ではなく、無知（モーハ）がなくなるとそれもなくなる。本質的には実在しないから。

一九九　迷妄（ブラーンティ）がある限り、それ（個我の状態）は存在する。誤知を増大させるのは、迷妄（プラマー

ダ）[180]であるから。縄に対して蛇〔の誤知〕があるのは、迷妄があるときだけである。迷妄がなくなれば、蛇もまたそのように必ずなくなる。

二〇〇　無明とその結果（現象世界）は、無始であると認められる。しかし、明知（ヴィドヤー）が生じると無明の結果は、無始であっても、

二〇一　眠りから目覚めたときの夢のように、すべて根こそぎ滅する。それ（無明の結果であるこの現象世界）は無始であっても、永遠ではないことは明白である。過去の非存在のように。[181]

二〇二　過去の非存在は、無始であっても有終であると観察されている。〔アートマンは〕統覚という属性に限定されると、アートマンに対して個我の状態が虚妄分別される。

二〇三　〔アートマンは〕個我の状態ではない。それどころか〔個我と〕別のものであり、本質的にそれ（個我の状態）と異なっている。自らのアートマンと統覚は、誤知によって結びついている。

二〇四　それ（誤知）の滅は、正しい知識によってあるだろう。別の手段はない。正しい知識とは、天啓聖典によれば、梵我一如の識別知であると考えられる。

二〇五　これ（識別知）は、アートマンとアートマンでないものとの正しい識別によってのみ成立する。それゆえ、

内なるアートマンと非実在のアートマン（自我）との識別がなされるべきである。[182]

二〇六　泥水の泥を完全に取り除けば、水は清らかになる。そのように、煩悩がなくなれば、清らかな光であるアートマンは輝く。

二〇七　非実在のもの（自我）が滅したとき、実在（最高）のアートマンが現れ、それがこの内なるもの（個我）であると理解できるだろう。それゆえ、実在のアートマンから、自我などの（付託された非実在の）ものを完全に必ず取り除くべきである。

二〇八　それゆえ、この知識所成という称号を持つもの（蔵）は、最高のアートマンではありえない。変化するから。愚鈍である（知者ではない）から。制限されているから。見られる対象であるから。逸脱している（常に働いているわけではない）から。無常なものは、常住なものと認められない。

〔歓喜所成の蔵〕

二〇九　歓喜所成のもの（蔵）は、暗質[183]が変化したものである。それは〔永遠の〕歓喜（アートマン）の影像として映し出された姿で現れるだろう。それは好ましいなどの属性を持つ。[184]それは自分が望む対象を得るときに生じる。善業の結果が経験されるとき、目的達成者[185]の歓喜が自ずと輝く。そのとき、身体を持つ持つ人間であれば誰でも、努力なしで歓喜が大いに生じる。

二一〇　歓喜所成の蔵は、熟睡中に最大限に現れる。夢を見ているときと覚醒時においては、望むものなどを見るときに少しだけ現れる。

二一一　この歓喜所成のものは、最高のアートマンでは決してない。属性に限定されているから。物質原理の変化したものであるから。[186] 善くなされた行為の結果であるから。変化した〔他の〕集合（蔵）のなかに含まれているから。[187]

〔続く〕

註

79　山本和彦『ヴィヴェーカ・チューダーマニ（一―七二）―不二一元という生き方―』（『佛教學セミナー』第一一五号、二〇二二）の続編。註番号も前編から続く。

80　ŚU 5.12: sthūlāni sūkṣmāṇi bahūni caiva rūpāni dehī svagunair vṛṇoti |「身体を有する者（アートマン）は、各自の徳によって、粗大な、もしくは微細なさまざまな形を選ぶ」参照。

81　「五唯」は声唯（śabdatanmātra）、触唯（sparśatanmātra）、色唯（rūpatanmātra）、味唯（rasatanmātra）、香唯（gandhatanmātra）という五つの微細な要素。

82　鹿は音、象は接触、蛾は色、魚は味、黒蜂は香りが感官の対象であり、それぞれがそれぞれの対象と結びついて、五元素（虚空風火水地）へと分解する。つまり死ぬ。Grimes 2004: 96参照。

83　ヴァイシェーシカ（Vaiśeṣika）学派とニヤーヤ（Nyāya）学派、サーンキャ（Sāṃkhya）学派とヨーガ（Yoga）学派、ミーマーンサー（Mīmāṃsā）学派とヴェーダーンタ（Vedānta）学派とはそれぞれ姉妹学派であり、以上の六つの古代インドの宗教哲学の学派。中村元『インド思想史第2版』（岩波全書、一九六八）一三八参照。

84　「満足、慈悲、忍耐、正直、寂静、自制」は解脱の原因。VC 71参照。

85　「他のもの」（parārtha）を、Madhavananda 192]は「他者のためのもの」、動物が食べるための死体と解釈する。しかしここでの「他」

は VC 139, 142に従えば、身体というアートマンでないものである。ここでの自他は、自がアートマン、他が身体のことである。「もの」（artha）は VC 74で言われた「髄、骨」などである。

86 「自分を殺している」。VC 4「自殺者」、「自分を殺している」参照。

87 無知ゆえに身体などに人は執着する。執着する人は自分を殺している。VC 4, 85参照。

88 VC 88cd: yam jitvā munayo yānti tad viṣṇoḥ paramaṃ padam ‖ = KaṭhU 3.9cd: so 'dhvanaḥ pāram āpnoti tad viṣṇoḥ paramaṃ padam ‖「彼は人生の彼岸である、ヴィシュヌ神のあの最高の境地に到達する」。

89 地水火風虚空という五つの微細な元素が分割、混合（pañcīkaraṇa）され、五つの粗大な元素である地水火風虚空が作られる。VC 75, 76参照。それぞれの粗大な元素は地水火風虚空よりなるが、元素の要素の強いものの呼称となる。地が強いと地と呼ばれ、水が強いと水と呼ばれる。中村一九九六：二五一―二五三参照。

90 「個我」（jīva）は、シャンカラによれば行為の結果である業により輪廻する主体。中村一九八九a：三五九、四六三以降参照。

91 dhī（統覚）と buddhi（統覚）は同義。中村一九九六：三三四参照。

92 VSā 66: mano nāma saṃkalpavikalpātmikāntaḥkaraṇavṛttiḥ |「思考機能とは、意志と分別を本質とする内官の作用である」。ここでのマナス（manas）の訳語については、中村一九九六：二四三に従った。なお、マナスの訳語として「意」は器官、「思考機能」は作用、「心」は場所、もしくは総体を意味内容としているが、VC 171–185のマナスをテーマとする箇所とそれ以外の箇所でも煩雑さを避けるため主に「心」と訳した。

93 VSā 65: buddhir nāma niścayātmikāntaḥkaraṇavṛttiḥ |「統覚とは、決定を本質とする内官の作用である」。シャンカラは、マナス（意）とブッディ（統覚）を同義と見なす。前田一九八八：二六五参照。統覚、思考機能（意）、心、自我意識という四種類の内官の作用については、中村一九九六：三一〇―三一一参照。

94 VC 105「『私が〔見ている〕』という誤見」、VC 106「「私が行為者である」「私が享受者である」という誤見」参照。

95 「生気」（prāṇa）は生命を維持し活動させるエネルギー。中村一九八九a：五二八―五三二参照。

96 「媒気」（vyāna）は身体全体に行き渡っている気。

97 「上気」（udāna）は身体からアートマンを上に出す気。

98 「等気」（samāna）は食物を消化する気。

99 VC 94「発声器（口）、手、足、排泄器、生殖器」参照。

100 VC 94「耳、皮膚、眼、鼻、舌」参照。

101 VC 97「呼気、吸気、媒気、上気、等気」参照。

102 「虚空」。原語は abhra（アブラ、虚空）。ここでの「虚空」（abhra）は VC 75の虚空（nabhas）のことであると思われる。

103 VC 75「虚空（ナバス）、風（ナバスヴァット）、火（ダハナ）、水（アンブ）、地（ブーミ）は微細な元素である」参照。

104 VC 95参照。

105 「限定的属性」（upādhi）についてはシャンカラは次のように説明する。US 1.17.16: kalpyopādhibhir evaitad bhinnaṃ jñānam anekadhā | ādhibhedād yathā bhedo maṇer ekasya jāyate ‖「まさに分別された限定的属性によって、この知識は多様に区別される。限定的属性の相違によって、宝石は一つであるにもかかわらず、相違が生じるように」。アートマンは唯一であるが、限定的属性のために多様に見える。一つの宝石が、ある色の近くにあるとその色という属性に限定されて、その色に見えるようなものである。前田一九八〇：一八九参照。US 1.15.29. sopādhiś caivam ātmokto nirupākhyo 'nupādhikaḥ | niṣkalo nirguṇaḥ śuddhas taṃ mano vāk ca nāpnutaḥ ‖「このように表現されたアートマンは、限定的属性を持つ。限定的属性を持たないもの（アートマン）は、表現できず、部分を持たず、属性を持たず、清浄である。意も言葉もそれ（アートマン）に達することはない」。前田一九八〇：一九一参照。

106 夢のなかのアートマンは外的なものではなく潜勢力を対象とする。身体などの属性に限定されていないので輝いている。前田一九八〇：一八八―一九二参照。

107 「自ら輝いている」。VC 100, 153, 191, 213, 240, 381, 508, 536: svayaṃjyotiḥ | = NPU 8.23, 9.23: svayaṃjyotiḥ ... | シャンカラの「自ら輝くもの」（svayaṃjyotis）については前田一九八〇：一六五参照。

108 VC 96「「私である」と誤見するから」、VC 106参照。

109 「『私が…』と誤見する」。VC 96, 105参照。

110 「徳」（guṇa）は純質（sattva）、激質（rajas）、暗質（tamas）という三徳（triguṇa）のこと。BhG 14.5: sattvaṃ rajas tama iti guṇāḥ prakṛtisambhavāḥ | nibandhanti mahābāho dehe dehinam avyayam ‖「純質、激質、暗質という徳は、物質原理から生じる。マハーバーフ（アルジュナ）よ、［徳は］身体のなかで不滅の身体の所有者（アートマン）を束縛する」。以下、『バガヴァッド・ギーター』第一四章の最後まで三徳について詳説されている。

111 BĀU 2.4.5 = 4.5.6: na vā are patyuḥ kāmāya patiḥ priyo bhavaty ātmanas tu kāmāya patiḥ priyo bhavati |「ああ、夫を愛すから夫が愛しいのではなく、自己を愛すから夫が愛しいのである」など参照。ブッダも同様のことを言っている。SN 1.1.2.3: natthi attasamaṃ pemaṃ ＝「自己ほど愛しいものはない」。中村元一九八六：二四、二三六参照。

112 「非顕現」(avyakta)。BhG 2.28: avyakādīni bhūtām vyaktamadhyāni bhārata | avyaktanidhanāny eva tatra kā paridevanā ＝「バーラタよ、万物は、始まりには顕現しておらず、中間に顕現し、実に終わりにも顕現しない。そのとき何の悲嘆があろうか」。上村一九九二：一四七、一八一参照。

113 「三徳」(triguṇa)。VC 106註参照。

114 Madhavananda 1921は「他のもの」(parā) を「優れたもの」と解釈する。

115 VC 113b: yataḥ pravṛttiḥ prasṛtā purāṇī | = BhG 15.4d: yataḥ pravṛttiḥ prasṛtā purāṇī ＝「そこ（プルシャ）から、太古の活動が流出した」。

116 マナス（manas）を「心」と和訳することについては、中村元訳『ブッダの真理のことば・感興のことば』（岩波文庫、一九七八）七一参照。

117 「一瞥するだけで理解する人」(dṛgvyāḷīḍhas) を直訳すると「目で舐める人」。

118 BhG 4.40ab: ajñaś cāśraddadhānaś ca saṃśayātmā vinaśyati |「無知な者、不信心な者、疑う者は滅びる」参照。

119 YS 2.32: śaucasaṃtoṣatapaḥsvādhyāyeśvarapraṇidhānāni niyamāḥ ＝「勧戒は清浄、知足、苦行、読誦、自在神への祈念である」。

120 YS 2.30: ahiṃsāsatyāsteyabrahmacaryāparigrahā yamāḥ ＝「禁戒は非暴力、正直、不盗、梵行、不所有である」。

121 YS 2.29: yamaniyamāsanaprāṇāyāmapratyāhāradhāraṇādhyānasamādhayo 'ṣṭāv aṅgāni ＝「〔ヨーガの〕八階梯は禁戒、勧戒、座法、調気、制感、凝念、禅定、三昧である」。

122 BhG 13.7: amānitvam adambhitam ahiṃsā kṣāntir ārjavam | ācāryopāsanaṃ śaucaṃ sthairyam ātmavinigrahaḥ ＝「慢心のないこと、偽善のないこと、不殺生、忍耐、正直、師に対する尊敬、清浄、固い決心、自己抑制」参照。これらは「土地を知る者」(kṣetrajña) の特徴である。上村一九九二：二〇一参照。

123 VC 110参照。

124 VC 128参照。

125 「大（マハット）」(mahat) は宇宙的な知の働きであり、ブッディ（buddhi）は個人的な知の働き。

126 「独存状態」（kaivalya）とはシャンカラによれば、解脱の境地のこと。中村一九八九a：七七五参照。

127 US 2.2.53: prasiddha eva tarhy ātmāhaṃpratyayavisayatayā dehaś cāyam iti |「この場合アートマンは、『私』という観念の対象として極成である。そして身体もまた『これ』としてそうである」参照。前田一九八〇：二一七参照。

128 「三つの状態」。覚醒（jāgrat）、夢（svapna）、熟睡（suṣupti）の三つ。

129 「五つの蔵」。食物（anna）、生気（prāṇa）、意（manas）、知識（vijñāna）、歓喜（ānanda）の五つ。

130 BĀU 3.4.2: na dṛṣṭer draṣṭāraṃ paśyeḥ |「あなたは、見る働きの〔主体である〕見る者を見ることはできない」参照。

131 KaṭhU 5.15 = ŚU 6.14: tam eva bhāntam anubhāti sarvaṃ tasya bhāsā sarvam idaṃ vibhāti ||「彼（アートマン）は彼だけを照らす。その反射によってすべては輝く。彼の輝きによって、このすべては輝く」参照。

132 「自我意識（アハンカーラ）」は、VC 125の大（マハット）から生じる。

133 「常に一つであり」（sadaikarūpaḥ）。rūpa には、姿、色、特徴、本質などの意味があるが、冗長になる場合には訳さなかった箇所もある。

134 KenaU 2.4: pratibodhaviditaṃ matam amṛtatvaṃ hi vindate |「覚知によって知られるもの、〔それはブラフマンの〕正知である。〔それによって〕人は不死を得るから」参照。

135 「まさにその（身体）のなかで」（atraiva）。VC 139: atrānātmani「この（身体）というアートマンでないものに対して」参照。

136 「洞窟」（guhā）はウパニシャッド文献のなかで、心臓（hṛdaya）の譬えとしてよく用いられる。心臓のなかにアートマンはいる。TU 2.1: satyaṃ jñānam anantaṃ brahma yo veda nihitaṃ guhāyāṃ parame vyoman | so ʼśnute sarvān kāmān saha brahmaṇā vipaścieti ||「ブラフマン（梵）は真実であり、知識であり、無限であり、洞窟のなかに隠れており、最高の虚空に隠れている。それを知る者は、全智者ブラフマンとともに、すべての欲望を満たす」、BĀU 4.3.7: katama ātmeti | yo ʼyaṃ vijñānamayaḥ prāṇeṣu hṛdyantarjyotiḥ puruṣaḥ sa samānaḥ sann ubhau lokāv anusaṃcarati dhyāyatīva lelāyatīva | |〔ジャナカ王〕アートマンとはどのようなものか。〔ヤージュニャヴァルキヤ〕諸感官のなかで識所成のものであり、心臓の内部で輝いているプルシャである。彼は同一でありながら、両方の世界を行き来する。彼は瞑想しているようでもあり、揺らいでいるようでもある」、ChU 8.3.3: sa vā eṣa ātmā hṛdi |「まさに、このアートマンは心臓のなかにある」など参照。「両方の世界」とは感官の対象と心臓内部。佐保田鶴治『ウパニシャッド』（平河出版社、一九七九）三五五参照。

137 「物質原理（プラクリティ）」。サーンキャ学派では物質原理は世界の質料因。前田一九八〇：一一二、一二三参照。

138 「これ（宇宙）をすべて照らす」。VC 119, 134参照。

139 統覚（buddhi）は「私が」行為している、「私が」身体であると判断する。アートマンはその統覚を目撃している。

140 「感官（ブッディ）を明晰にする」は、内官・マナスの浄化と同義。VC 11註参照。

141 BĀU 4.4.12: ayam asmīti ... |「私はそれである」参照。

142 「この」（atra）。アートマンでないものは、VC 142では「身体」（śarīra）と言われている。

143 VC 156「身体は食物から生じたもの」参照。

144 ラーフは日食と月食を起こす魔物。ヴァラーハミヒラ著、矢野道雄・杉田瑞江訳注『占術大集成1古代インドの前兆占い』（東洋文庫五八九、平凡社、一九九五）三二一―四六参照。ここでは、自ら輝いているアートマンをタマス（暗質）が遮ることの喩えとして、自ら輝いている太陽をラーフが遮るという神話が取り上げられている。

145 「徳（グナ）」は激質（rajas）、暗質（tamas）、純質（sattva）。

146 「徳の属性」。激質の属性は、VC 114によれば愛欲、怒り、貪欲、虚栄、怨み、自我意識、羨望、嫉妬など。暗質の属性は、VC 118によれば無知、怠惰、愚鈍、眠気、不注意、愚蒙など。純質の属性は、VC 121によれば〔師からの〕恩恵（プラサーダ）、自らのアートマンの経験、最高の寂静、満足、喜び、最高のアートマンへの到達。

147 鳥が果実を食べる話は、『リグ・ヴェーダ』1.164.20 = MuU 3.1.1 = ŚU 4.6にある。辻直四郎『リグ・ヴェーダ讃歌』（岩波文庫、一九七〇）三〇一―三〇二、佐保田一九七九：三七六―三七七など参照。

148 「創造神の恩恵によって」（dhātuḥ prasādena）は KaṭhU 2.20では dhātuprasādāt となっており「感官を明晰にすることから」という意味になる。佐保田一九七九：三七一参照。

149 「内官は浄化」（ātmaviśuddhi）。シャンカラは浄化されるアートマンを内官（antaḥkaraṇa）と解釈する。VC 11註参照。

150 「五つの蔵」。VC 127註参照。

151 「自ら輝く」（svayaṃjyoti）。VC 100註参照。

152 「存在・知・歓喜」（saccidānanda）はシャンカラ以降のブラフマンの定義。前田一九八〇：一一五、中村一九八九a：二五二参照。「存在・知・歓喜」がブラフマンの定義として最初に現れる文献は、『ヌリシンハ・プールヴァターパニーヤ・ウパニシャッド』。Karl H. Potter, *Encyclopedia of Indian Philosophies: Vol. III: Advaita Vedānta up to Śaṃkara and His Pupils*, Delhi: Motilal Banarsidass Publishers,

1981: 606参照。NṛPU 6: tasmād idaṃ saccidānandamayaṃ paraṃ brahma tam evaṃ vidvān amṛta iha bhavati |「それゆえ賢者は、この存在・知・歓喜から成る最高のブラフマンそのものとなり、ここ（現生）で不死になる」。なお NṛPU に対する註釈書はシャンカラ作ではない。中村一九八九a：四五参照。さらに ATU 10: saccidānandasvarūpaṃ brahmaiva ‖「存在・知・歓喜を本質として持つものは、ブラフマンのみである」; VSā 帰依文：akhaṇḍam saccidānandam avāṅmanasagocaram | ātmānam akhiladhāram āśraye 'bhīṣṭasiddhaye ‖「不可分であり、存在・知・歓喜であり、言葉と心の領域を超越しており、万物を支えるアートマンに、私は帰依します」; AĀU 61cd: sadghanaṃ cidghanaṃ nityam ānandaghanam avyayam ‖「存在そのもの、知そのもの、永遠の歓喜そのもの、不滅のもの〔が唯一不二のブラフマンである〕」など参照。

153 VC 155a: muñjād iṣīkāṃ iva ... | = KaṭhU 6.17: aṅguṣṭhamātraḥ puruṣo 'ntarātmā sadā janānāṃ hṛdaye saṃniviṣṭaḥ | taṃ svāc charīrāt pravṛhen **muñjad iveṣīkāṃ** dhairyeṇa | taṃ vidyāc chukram amṛtaṃ taṃ vidyāc chukram amṛtam iti ‖「親指大のプルシャである内我は、常に人間の心臓のなかに住している。ムンジャ草から茎を取り出すように、人は自分の身体からそれ（内我）をしっかりと取り出すべきである。人はそれ（内我）を輝く不死のものであると知るべきである。人はそれ（内我）を輝く不死のものであると知るべきである」。

154 KaṭhU 5.5: na prāṇena nāpānena martyo jīvati kaścana | itareṇa tu jīvanti yasminn etāv upāśritau ‖「どんな人でも、呼気によって生きているのではない。吸気によって生きているのではない。別のもの（アートマン）によって人々は生きている。その別のものに、これら二つは依存している」参照。身体がアートマンであれば、手足などを切断されれば人は死ぬ。しかし身体とアートマンは別であり、身体が損傷してもアートマンは無傷であり人が死ぬことはない。身体を支配する者はアートマンであり、支配される身体の損傷に影響を受けない。しかしアートマンが身体から出て行けば、身体は崩壊する。

155 VC 162d: brahmāham iti ... | = KaivU 17c: brahmāham iti ... | = AĀU 10c: brahmāham iti ... |「私はブラフマンである」。BĀU 1.4.10: ahaṃ brahmāsmīti |「私はブラフマンである」参照。

156 「五つの行為器官」。発生器（口）、手、足、排泄器、生殖器。VC 94参照。

157 VC 97参照。

158 VC 167bc: prāṇo bhavet prāṇamayas tu kośaḥ | yenātmavān annamayo 'nupūrṇaḥ| ≒ TU 2.2: tasmād vā etasmād annarasamayāt | anyo 'ntara ātmā prāṇamayaḥ | tenaiṣa pūrṇaḥ |「食物の精髄所成の人間の他に生気所成の内我がいる。それ（生気所成の内我）によって、彼（食物の精髄所成の人間）は満たされている」。VC 156参照。

159 「五感官」。眼耳鼻舌身の五つの感覚器官。

160 「現象」（prapañca）。『ヴェーダーンタ・サーラ』では、現象（prapañca）は粗大な身体（sthūlaśarīra）、微細な身体（sūkṣmaśarīra）、原因としての身体（kāraṇaśarīra）の三種類。中村一九九六：三二〇参照。原因としての身体については、VC 122で既出。

161 「心（マナス）」。マナス（manas）の訳語については、VC 95註参照。

162 ブッダも同様のことを言っている。SN 1.1.7.2: cittena nīyati loko | cittena parikissati | cittassa ekadhammassa | sabbeva vasam anvagūti ‖ 「心によって世間が導かれる。心によって〔世間が〕引き回される。心という一つのものに、すべてが従っている」。中村一九八六：八九参照。

163 VC 172註参照。

164 「浄化された心」。VC 11註参照。

165 「属性」（guṇa）。VC 177で「識別と離欲という属性（guṇa）」と言われている。さらに、VC 112で既出の純質、激質、暗質の三徳（triguṇa）のことも意図されていると思われる。つまり、激質や暗質というグナ（徳）の結果は輪廻であり、識別や離欲というグナ（性質）の結果は解脱である。

166 「徘徊させる」（bhramayati）。原語 bhrama（ブラマ）には、「さすらう」と「誤見」との両義がある。ここでは、誤って見ることが輪廻につながると言われている。

167 「付託」（adhyāsa）については、シャンカラの定義がある。BSBh *ad* BS 1.1.1: smṛtirūpaḥ paratra pūrvadṛṣṭāvabhāsaḥ |「「記憶という形で、他の場所で過去の経験が顕現することである」。シャンカラは「それでないものに対して、それであると認識すること」とも言っている。たとえば、「私は肥っている」「私は痩せている」という身体の属性を人はアートマンに付託している。人の本質はアートマンであり、身体ではない。アートマンでない身体に対して、アートマンであると認識することである。シャンカラは無明（avidyā）を「付託」（adhyāsa）と定義する。前田一九八〇：二五〇参照。

168 「作り出されたもの」（kalpita）。原語 kalpita（カルピタ）には、「分別された」と「作り出された」という両義がある。中村一九九六：六四参照。

169 「それ（心）によってのみ」。VC 172, 181参照。

170 「心を浄化」。VC 11註参照。

171 「見られる対象」。VC 208, 564, 565参照。

172 「影像」。VC 220註参照。

173 「個我（ジーヴァ）」。VC 91註参照。

174 VSā 73: ayaṃ kartṛtvabhoktṛtvasukhitvadukhitvādyabhimānatvenehalokaparalokagāmī vyāvahāriko jīva ity ucyate ‖「これ（知識所成の蔵）は、破壊者である、享受者である、楽しむ者である、苦しむ者の属性であるなどと誤認することから、この世とあの世を行き来する日常生活の個我と言われる」参照。

175 「自ら輝いている」（svayaṃjyotiḥ）。VC 100註参照。VC 191abc: yo 'yaṃ vijñānamayaḥ prāṇeṣu hṛdi sphurat svayaṃjyotiḥ | = BĀU 4.3.7: yo 'yaṃ vijñānamayaḥ prāṇeṣu hṛdyantarjyotiḥ puruṣaḥ |「このプルシャ（アートマン）は、知識からなり、諸感官の近くの心臓のなかで輝いている」。

176 土と瓶は同じものであり、瓶は名称に過ぎない。しかし、愚者は別物と見る。VC 230註参照。

177 「限定的属性」。VC 99註参照。

178 「個我」（jīva）。輪廻するアートマン。

179 「〔心臓の〕内部で」。VC 134参照。

180 「迷妄（プラマーダ）」（pramāda）は怠慢、不注意、等閑視などの意味。漢訳では放逸。ブッダの臨終の言葉は「怠ることなく、修行せよ」（appamādena sampādhetha）であった。パーリ語 pamāda は、サンスクリット pramāda と同じ。中村元訳『ブッダ最後の旅』（岩波文庫、一九八〇）一六八&三三二参照。しかし、ここでの pramāda は bhrānti（迷妄）と同義。

181 「過去（生起以前）の非存在」（prāgabhāva）は、無始有終の非存在。現象世界は無始であるが、明知が生じた後では有終である。山本和彦「インド思想における非存在について」『大谷学報』（七四―一、一九九四）四三―四五参照。

182 Madhavananda 1921は、テキストの -asat-（非実在）を -sadā-（永遠）と読んでおり、the eternal Self と訳している。非実在のアートマン（実在しない自分）とは、ここでは自我（ahaṃkāra）のこと。身体の場合については既出。VC 139–150参照。

183 「暗質」（tamas）。VC 115–118参照。

184 TU 2.5: tasya priyam eva śiraḥ |「〔歓喜所成の〕彼の頭はまさに好ましいものである」参照。

185 「目的達成者」（kṛtin）。なすべきことをなした人。解脱者。

186　VC 137参照。

187　TU 2.2-5によれば食物所成の蔵、生気所成の蔵、意所成の蔵、知識所成の蔵、歓喜所成の蔵は、それぞれ先行する蔵に含まれる。湯田豊『ウパニシャッド』（大東出版社、二〇〇〇）三四一参照。